石井勲の漢字教室

4 親こそ最良の教師

Ⅰ 親こそ最良の教師



第2章 石井・ドーマン方式教育法の原理

Ⅰ 石井・ドーマン方式教育法とは

ドーマン博士の幼児開発法

植物人間と言われるほどの重度の脳障害児を、歩くことができるようにしたり、本が読めるようにしたりして、奇跡を行なった人として、各国のリーダーズダイジェスト誌に数回にわたって、掲載され、世界中に紹介されたグレーン・ドーマン博士は、研究のためにはどんなに酷暑極寒の地をも恐れず訪問されている方ですが、日本には昭和四十七年まで一度も訪問されたことかありませんでした。

ドーマン博士の来日は、昭和四十七年、日本リーダーズダイジェスト社が、私とドーマン博士との共著の刊行を企画したことから実現されたものです。

私は、昭和四十五年ごろから、リーダーズダイジェスト社の依頼で、〝石井方式漢字教育〟実践のための教材開発をしていましたところ、四十六年に講談社から『ドーマン博士の幼児開発法』が刊行され

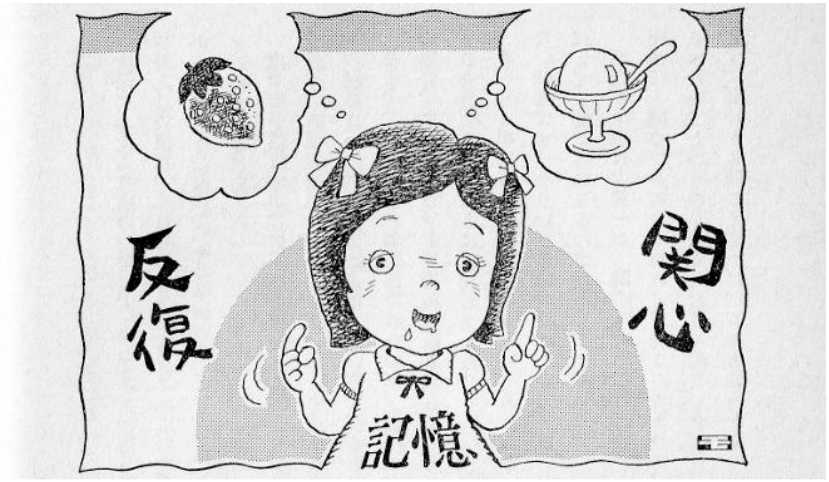
て、その幼児開発法の原理が、石井方式の教育原理とまったく同じであることがわかり、この際、共著を刊行してはどうか、ということになったからです。

欧米における文字の学習は、まずアルファベットの学習から始められます。「アルファベットを学び終えない限り、それらによって構成されている単語の学習に入れるわけがない」という考えがあるからです。ところが、「その学習の仕方はまったく間違っている」と、初めてそう主張したのがドーマン博士です。

欧米の子供たちが、アルファベットに関心を示すようになり、これが学習できるようになるのは一般に五、六歳以後のことだとされています。それで、アメリカでは小学校に入っても、アルファベットの読めない子供が多いことに、長い間、悩まされてきました。

そこで、研究の末、考え出されたのが、例の「セサミストリート」です。子供の喜びそうな劇や画の中に、アルファベットを巧みに取り入れて、それを子供に楽しんで反復して見させることにより、これを覚えさせることに成功しました。

もともと単なる音声しか表わさない〝A〟とか〝B〟とかという文字は、幼児にはまったく面白くない代物です。そういう興味の持てない文字は、どんなにていねいに教えてやったところで、幼児にはとても覚えられるものではありません。



記憶の原理は、第一が〝関心〟、第二が〝反復〟で、これを記憶の二大原理と言います。けれども、記憶は〝関心〟があって初めて可能なのであって、関心のないことはどんなに反復したところで記憶されない、というのが大脳の自然の働きです。昔から言われている「心ここにあらざれば見れども見えず、聞けども聞こえず」は、これを言ったものです。

ところが、strawberry（苺）とか ice-cream（アイス・クリーム）という、子供の大好きな物を表わした単語になりますと、これを教えてやった途端に、子供は目を輝かせてこれを見つめます。そして、たちまちのうちに、その字形全体

を大脳に焼きつけてしまいます。だから、〝ｓ〟や〝ｔ〟は覚えられなくても strawberry や ice-cream は覚えられるのだ、と博士は言います。

一般に幼児は最も無能力者に近いと考えられていますが、実は、最近の大脳生理学が明らかにしていますように、直観的、機械的な記憶力にかけて、人間の長い一生のうちでも、この幼児期が一番強い時期なのです。しかも、幼児は、見る物を全体として実に見事に把握するという特性を持っています。

だから、〝ｓ〟や〝ｔ〟などの部分にとらわれずに、strawberry や ice-cream という綴りを全体的にしかも瞬間的にこれをとらえて、大脳に納めてしまうことができるわけです。この場合、strawberry や ice-cream の実体は、すでに視覚や味覚器官を通して体験し、熟知して、それとその綴りとを同じ視覚中枢において結合することで、簡単に学習が完成するのです。

そうなれば、〝ｓ〟や〝ｔ〟など、個々の字についての知識はまったくなくても、綴り全体がその実体を反射的に想起させてくれます。だから、個々の文字は読めないのに、単語は読めるわけです。「ｓやｔは strawberry の一部だから、ｓやｔを覚えることは strawberry の全体を覚えるよりもやさしいはずだ」と考えるのは大人の論理です。記憶は、関心があって初めて可能なのですから、「幼児には関心の持てないｓやｔは覚えられないが、大いに関心のそそられる strawberry は覚えられる」というのが事実なのです。このことを初めて発見したのがドーマン博士だったのです。

英語も日本語も原理は同じ

この考え方は、わが国の〝漢字〟と〝かな〟との関係にぴったりと当てはまります。まだ文字というものをまったく知らない幼児に、〝苺〟という漢字と〝い〟というかなを一緒に教えてみますと、幼児は例外なく〝苺〟を先に、しかも容易に覚えますが、〝い〟の方はなかなか覚えません。その理由は、まったく strawberry と〝ｓ〟との関係と同じで、関心の強い〝苺〟は覚えられますが、まったく関心の持てない〝い〟は覚えられないのです。

「初めて文字を学ぶ幼児にとっては、漢字の方がかなよりも覚えやすい」

ということを私が発見したのは、昭和二十八年、今から二十七年も昔のことで、ドーマン博士の発見と同じころです。

それで、従来の「アルファベットを学び終えてから、単語の学習へ」「かなを学び終えてから漢字の

学習へ」という教育とはまったく反対の順序で学ばせる教育法を、〝石井・ドーマン方式〟教育法と呼ぶことにしました。

このことは、ドーマン博士が初めて来日された昭和四十七年に、私が博士に提案して同意を得たものです。この時、博士は笑いながら、「ドーマン・石井方式と呼んだ方がもっと良い」と言われたので、「日本語で言う時には〝石井・ドーマン〟で、英語で言う時には〝ドーマン・石井〟と言うことにしましょう」と言って、笑い合ったものです。

私の発見は、指導主事をやめて、初めて小学校の一年生を指導した年のことであって、それが昭和二十八年なのです。

私が指導主事をやめて小学校の一年生の担任になったのは、〝がっこう〟と教えないで、初めから〝学校〟と教えた方がよいのではないかと、かねてから考えていたことを、ぜひ実践してみたかったからです。

「漢字はかなよりもやさしい」だけではありませんでした。驚いたことには、「漢字は言葉よりも覚えやすい」ことが、その後わかったのです。それは言葉を覚えることのできない重度の脳障害児、精薄児が、漢字を理解し、覚えたことでわかりました。

〝花〟という漢字を見れば花を、〝窓〟という漢字を見れば窓を指さして、その漢字が意味する内容を理解し、覚えていることを私たちに知らせてくれたのです。その時、私たちが「よくできた。えらいねえ」と言って褒めてやりますと大層喜び、そういう学習を楽しんで反復するようになりました。

こうして、漢字を理解し、漢字を見ればその意味内容を想起する、ということを反復練習していますと、やがて漢字を見ればそれを音読できるようになります。これは、頭を使う仕事が頭の働きを活発にし、発達させ、言葉を覚えることを可能にしたのだと考えられます。

足を使うことによって足が丈夫になるように、頭を使うことによって頭の働きは良くなるのです。足を使わないで足を丈夫にすることが不可能のように、頭を使わないでいては決して頭は良くなりません。

ところが、今まで脳障害児、精薄児に対して、頭が悪いからという理由で、頭を使う仕事を極力避けるようにしてきました。これではますます頭の働きが悪くなるばかりです。足が弱い者にはできる限り足を使わせるように仕向けることが必要なように、頭の弱い子にはできる限り頭を使わせるように仕向

けることが必要なのです。

幼児期は記憶力の強い時期

とは言うものの、能力を越えた足の過度の使用は逆に足を痛めるように、その頭で処理できない問題を与えたのでは、頭の働きは決して良くなりません。進んで、喜んで頭を使うような、そういう問題を与えることが大切です。

重度の脳障害児、精薄児が言葉を覚えないのは、言葉がその子供たちにとって余りにもむずかしいものだからです。

普通の人間は、母国語を覚えるのに苦しんだという記憶がありません。気がついた時には、すでに母国語が自由自在に操れるようになっていたのです。だから、言葉を覚えるのはやさしいことだと、誰もがそう思い込んでいるのです。

ところが、同じ言葉でも外国語だと、だれも決してやさしく覚えられるとは思っていないでしょう。なぜ、母国語だとやさしく、外国語だとむずかしくなるのでしょうか。

実は、それを学習する時期の違いにその原因があるのです。外国語の学習がむずかしいように、言葉というものはもともとは覚えにくいものなのです。言葉は、発生するやいなや消えてしまうので、発せられた瞬間に、これを捕えなければならないからです。

機関銃のようにあわただしく連続して発せられる、微妙な違いのある多くの音声を、片っぱしからこれを正しく捕えて、これを頭の中に刻みつけていくことは、並たいていの能力でできることではありません。能力が高くても、同じことを何十回となく反復して耳から入れない限り、とても覚えられるものではありません。

幼児期は、そういう繰り返しに耐えられる、というよりも繰り返しの大好きな時期で、かつ最も記憶力の強い時期なので、言葉を覚えるのに苦痛を感じないのです。だから、幼児期を狼少女・カマラのようにまったく言葉を耳にしないで過ごしてしまうと、もう言葉が覚えられなくなってしまうわけです。

漢字は〝消えない言葉〟

ところが、漢字は言葉のように、現れるや否や消えてしまうことがありません。つまり、覚えるまで

待っていてくれるものです。だから、言葉の覚えられない重度の脳障害児、精薄児でも覚えることができるわけです。

でも、こういうことは、そういう事実に何回も出合うことによって、あとから考え出した理由であって、そういう事実に出合うことがなかったら、とても考え出すことはできなかったと思います。そういう事実に出合ったことのない読者諸氏には、なかなか信ずることができないと思います。信じられないのが、むしろ当然だと思います。

だから、そういう事実を自分で体験するまで、私の言うことを信じないで下さって結構です。ただ、石井にだまされたと思って、だまされてもともとだという気持で、実践してみて下さるとよろしい。そうすれば、私と同じように、きっとこの事実に驚嘆されるだろうと思います。

実は、この事実の発見も、ドーマン博士は私と同じようにしているのです。私とドーマン博士とは、遠く太平洋を距てて全く相会うこともなく、同じ事実に出合い、同じ理由を考え出していたのです。それは、それまで誰からも気づかれなかった事実が発見される運命にあった、そういう時期に達していたのだ、というような思いが致します。

漢字はその典型的なものですが、文字というものは、もともと〝目で見る言葉〟です。耳で聞く言葉は、発せられるやいなや消えてしまうので、昔は、大切な言葉を残すためには、語り部（かたべ）のような存在に頼らざるを得ませんでした。〝消えない言葉〟は、人類の願望だったのです。

その願望は、〝目で見る言葉〟文字の発明によって果たされました。百万年に及ぶ長い人類の歴史の中で、やっと達せられた願望だけに、それは〝耳で聞く言葉〟よりも当然高度のものであり、従って学習に困難なものであるに決まっている、と思い込んだのも道理だと思います。

人間は言葉（ただし発音を伴わない、学問用語では〝内言〟と呼ぶ）で思考し、その思考を言葉で他人に伝えます。人間はこうして知恵を蓄積することにより、百万年の長い年月を一歩一歩前進して、現代の文明社会を築き上げました。

チンパンジーは、生後の二年間くらいは人間の子供に負けないだけの知恵を持ちながら、言葉を持たないために、今でも百万年前とまったく同じ生活をしています。チンパンジーに、人間が言葉の教育を施したら、チンパンジーは言葉を覚えるだろうか。言葉を覚えたら、チンパンジーの生活がどう変わる

だろうか。

そんな好奇心から、チンパンジーに言葉を教える試みが一九三〇年代以後盛んになりました。

その中で、アメリカのケロッグ夫妻により、グアと名付けられたチンパンジーが、生後約一年半にわたる教育で約百語を理解することに成功したことが報告され、有名になりました。けれども、言葉を使うことは、まったくできなかったと報告されています。

その後、ヘイズ夫妻やガードナー夫妻等の貴重な報告があって、一九七〇年代に至り、プリマック夫妻やジュアン・ランボー氏により、視覚文字を教育することによって驚くべき成果があったことが報告されました。

プリマック氏のサラと名付けられたチンパンジーや、ランボー氏のラナと名付けられたチンパンジーは、いずれも百数十の文字（それは全く象形的性格を越えた純然たる符号）を覚え、これを使って文章表現（英語の文法に則った）を行ない、人間と思想を交換することに成功したのです。

これらの事実は、まだそういう指摘がだれからもなされていませんが、私は、「視覚言語が聴覚言語よりも覚えやすい」ためであり、また、それを実証する証拠になる事実だと思っています。

かなよりも漢字の階段は低い

教育というものは、「階段を登るような状態で進んで行くのが最も効率的である」ことは誰も異論のないところだと思います。低い所からその人の足の運びに合った間隔と、高さで一歩一歩高い所に登って行くならば、どんなに高い所にも行き着くことが出来ます。

いきなり足の届かないような高い段があるかと思えば、すぐ下がる段に移るようでは、高い所に到達することは、まず不可能です。

高い所に登ろうとする者が、こんな階段を利用することは、実際の階段登りではあるはずもありませんが、これが教育の世界になりますと、その階段が目に見えませんから、いきなり足の届かない段を目指したり、下がる段に足をやったりし、それに気づかないことが多いものなのです。

最初にかなを学ばせ、かなを学び終えてから漢字の学習に移るのも、その例の一つだと言えます。

だから、今、子供たちが、学校でそういう教育をさせられていることを思いますと、私は心が痛んで、たまらない気持になります。

漢字学習の階段は低くて、かなの階段はそれより高い所にあるのですが、先入的固定観念のために、



それが逆に見えるものですから、そして、それを信じ切ってまったく疑いを持たないものですから、私一人の力くらいでは、これをどうすることもできません。

それでも、嬉しいことに、識者の間では「初めて文字を学ぶ幼児には、漢字の方がかなよりも覚えやすい」という考えが次第に受け入れられつつあります。この教育を、小学校でかな学習を始めるのに先立って幼稚園で始めようという先生方も、この十年間に随分増えました。

参考までに、最近、新聞や週刊誌などに紹介された例を掲げてみます。

まず、毎日新聞の五十五年六月十七日の朝刊に「ボク〝梅雨〟読めるんだ」という題で、私の勤める板橋の青桐幼稚園の漢字学習のもようが紹介されました。ついで、同年七月二十五日号の週刊朝日に「幼児にはかなより覚えやすい」と謳って、東京足立区の梅島幼稚園が取り上げられています。ここは四十三年から漢字教育に取り組んでいて、全国でも草分け的な存在です。

ここでは、私の製作の漢字絵本を使って学習を進め、季節に合わせた歳時記風の話や童話の他、俳句や諺を教えるなど、着々と漢字学習が効果を上げている様子が紹介されています。

このように、漢字教育を実践している幼稚園が、日本全国ですでに三百園を越えています。

これらの幼稚園の実践の結果が、近い将来に他の多くの幼稚園の目を聞かせてくれるだろうと思い、私はそれを今楽しんで心待ちしているところです。

2　石井・ドーマン方式教育の実際

まず言葉の教育を

前著『石井式漢字教育革命』で、「黄色い縞模様のある蝶を見ても、〝黄色〟や〝縞〟という言葉を知らない幼児には、その蝶の特徴が目に入るだけで、意識されず、従って、記憶できない」という実験

例を述べ、「人間は言葉で物を見、考える」ので、言葉の教育があらゆる教育の基礎であり、最も重要だと述べました。

また、狼に育てられた少女が、まったく人間性を持たなかったけれども、わずかながら、言葉を覚え、これを使うことで人間性を具え始めた、という事実も、何より言葉の重要性を物語っていると思います。

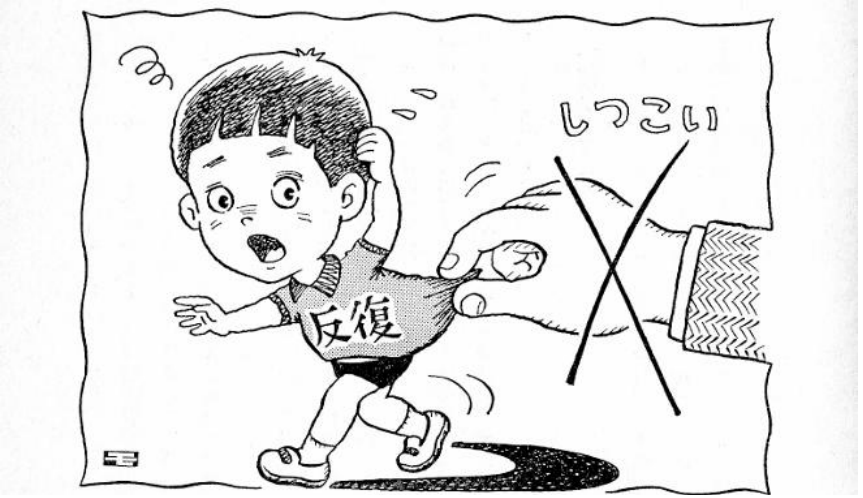
だから、私はまず第一に、言葉の教育を重視することをお奨めします。言葉の教育とは何か、子供に言葉を語りかけることです。全身に愛情をみなぎらせて、やさしく語りかける機会を少しでも多く設けることです。子供に面と向かい合って、その目をやさしく見つめながら、子供に語りかけることです。高からず、低からず（とは言うものの、いく分高めに）、速からず、遅からず（とは言うものの、いく分ゆっくりめに）自分に表現できる最高の言葉で語りかけることです。

いつもそうすることはむずかしいでしょうが、とにかくそういう努力をすること、そういう意識を持つことです。何でもそうですが、とりわけ言葉の学習は〝模倣〟の一語につきます。だから、何よりも良い手本が必要です。良いお手本は、親しか与えることができません。

昔からよくやることですが、「いない、いない、ばあ」や「おつむ、てんてん」などのように、動作と言葉とがいつも伴って同じ形を取るような所作は、言葉の学習の初期には特に有効なものです。できる限り、くり返しくり返しやってやることが大切です。

子供というものは、くり返しを非常に好むものです。世界的な数学者として知られた、故・岡潔先生は、お孫さんを通してそのことを次のようにおっしゃっています。「初めて鐘を鳴らして見せた時は〝オヤッ〟というような表情を見せる。二度目には〝さっき聞いたことのある音だ〟というような、なつかしい物を眺める表情に変わる。ところが三度目になると、〝もっと鳴らせ〟と要求して、いつまでたってもそれに飽きる様子がない」と。

これは幼児の姿をよく表現しています。幼児はだれでもこういうものですから、それを体得することができ、能力を育てることができるのです。しかし、そのためには三回までは同じことを繰り返して手本を示してやることが必要であり、また、それ以後、子供がさらにそれを繰り返すことを要求したら、いくらでもその要求に応えてやることが必要だ、ということも、親たる者は知らなければなりません。



反復こそ向上の秘訣

ところが、せっかく子供が能力向上の秘訣である、〝繰り返しを好む性格〟を持っているのに、これを打ちこわしている親が多いのです。つまり、子供の要求を「しつこい」と言ってたしなめることです。だから、子供の方も、同じことを反復することはいけないことだ、と思うようになり、反復したい気持をおさえ、やがて何事でも反復することをしない子供になってしまうのです。

何事であろうと、能力向上には反復練習が最も必要なことで、それは成功のためには絶対に欠くことのできないものです。世の中で成功している人は、すべて〝しつこい〟ほど一つのことを反復追求した人であることは、どなたもお認めのはずです。

そこで私も、しつこいことを承知で繰り返して言います。子供はだれでも生まれつき能力向上の要素である〝しつこい〟性格を持っているのです。これを一生持ち続けられるよう、親たるものは、これを見守ってやることが大切です。かりにも「いつまで同じことを繰り返せば気がすむの」などと言って、子供の大事な宝を傷つけないでほしいと思います。

私は〝幼児はみな神童だ〟と思っています。その神童が〝二十過ぎればただの人〟になってしまうのは、親を始め周囲の人たちが、子供の持つ〝成功の秘訣〟である反復を好む性格を傷つけるからだ、と思っています。これが世に〝十で神童、十五で才子、二十過ぎればただの人〟と言われる理由だと、私は信じております。

反復を好まなかったら

さて、もし三回繰り返しても、それ以上子供が繰り返しを望まない場合は、どうしたらよいでしょうか。それは、その手本を示す親の態度に、楽しい雰囲気がなかったせいかも知れません。もしそうであったら、心から楽しいことをしているように親自身が思い込んで、お手本を示してやる必要がありま

す。

それでもなお、子供が繰り返しを望まないならば、それがその子にとっては、過酷な仕事であったのかも知れません。つまり、むずかし過ぎて出来ないのではないか、と考える必要があります。

子供というものは、だれでも、〝むずかしいことを克服することに喜びを感ずる〟という性格を持っています。少々の困難や失敗は、喜びこそすれ、決してそれにへこたれるものではありません。

よちよも歩きを始めたばかりの子供は、歩いては転び、歩いては転びしています。

しかし、「ああいやになった。歩くことはもう諦めた」などという子供は、世の中に一人もいないはずです。

だから、もし子供がそれを求めてやろうとしないならば、それがどんなにやさしそうに見えることであっても、その子供にとっては〝むずかし過ぎること〟だと考えてみる必要があるのです。それがその子供にとって適当なむずかしさであるならば、子供は三回の挑戦で本能的にそれを感じ取り、その仕事を克服することに挑戦するはずです。

そういうわけで、子供がそれを求めてやらない時は、それよりも一段低い仕事は何かをよく考え、それよりもやさしい仕事を見つけて、これを与えてやることです。必ずやる気を起こす仕事が、何かあるはずです。

生まれつき生命力の強い者と、弱い者とのあることは確かだと思います。しかし、生きている以上、どんなに弱くても生命力はあるのであり、やる気はあるのです。

ただ、生命力の弱い子供にとっては、やる気の起こる仕事の範囲が狭いだけであって、決してないのではありません。

その弱い〝やる気〟の起こるようなやさしい仕事を与えることで、子供のやる気を起こしてやれば、その弱い火も次第に強い火にと燃え盛っていくものです。それが教育というものであり、それが親のしてやれる最高の贈り物ではないでしょうか。

這うことが歩く能力を育てる

『ドーマン博士の幼児開発法』に紹介されている話ですが、博士が 終戦で復員し、脳障害児の治療に従事した初期のころです。貧しいために治療の受けられない脳障害児の方が、当時は最も有効だと信

じられている治療を受けている脳障害児よりも、症状が良くなっていることが多いのに気がついた博士は、〝良くなるには良くなる理由がなければならない〟と考え、その原因を追及しました。その結果、現在の治療訓練の一つ、〝這い這い運動〟を発見したのです。

脳障害のため、歩くべき年齢を過ぎても歩けない子供がいたとします。歩く能力は、歩くことによって向上するものですから、当然、治療法として〝歩く訓練〟があります。しかし、脳障害児にとっては、正常児以上の苦痛が訓練に伴います。

だから、歩く訓練は長く続けることはできませんし、子供の方からは求めて歩くことはありません。従って歩く訓練はどうしても不足がちということになりますので、歩く能力がなかなか育たないのです。

ところが、貧しい家の脳障害児は、歩く訓練など全く受けないで、部屋の中に置きざりにされています。しかし、子供の目は開いていますので、目にした物に手を伸ばし、届かなければ、取ろうとして、そのきかない手足を努力して働かせます。

こうして子供は、部屋の中を意欲的に這い回りますが、この這い回るために手足を働かせることが、〝歩く訓練〟以上に治療的効果があることを、ドーマン博士は突きとめたのです。

一日にわずかばかり歩く訓練をしたところで、一日中這い回ることの効果には、とても及ばないのです。それは、子供にとって義務的、受身的な手足の使い方と、自ら求めて意欲的、能動的にする手足の働かせ方との違いです。

このようにして、這うことの価値が、ドーマン博士によって発見されました。人間は、歩くことの前に這うことをしますが、それは歩く能力を作るための前段階の大切な訓練だったのです。そればかりか、這うためには、両手と両足と頭の、五つの部分が、一緒に連繋して働かなければならず、それには一定の型があることを発見しています。

つまり、幼児は這うことにより、両手、両足、頭を連繋的に働かせることを学び、それは知的発達をもうながす効果があると言うのです。だから、這う過程を通らずにいきなり歩かせる〝歩行器〟なるものは勿論、這うことを制限している〝ザークル〟などは、幼児にとって大層有害なものである、と指摘しています。

ドーマン博士の行なう有力な治療法として、両手・両足・頭に一人ずつついて、五人が連繋して行な

う〝這い這い型運動〟があります。けれども、その仕方をここでは、文章ではうまく説明できませんし、この運動が正確にできなかったら、かえって有害ですから、説明することを控えます。

その代わり、私の所に、イギリスの国営放送局が制作した、この訓練を行なっている現場を撮影した映画フィルム(二巻)があります。必要の場合はそれを度々公開しておりますので、それを御覧下さい。また本文、〝第3章 脳障害児の漢字による訓練法 ー バニーの記録〟で、そのシナリオを紹介しました。参考になると思います。

また、藤沢市にある〝脳研〟では、ドーマン研究所で学んだ先生方が、この訓練法を実践して治療に当たっていますので、そこでよく学習し、身につけられることも良いと思います。それからまた、後述する佐藤友泰氏の創英教育研究所でも、この方法を実践しています。近ければ、そこに通うことをお奨めしますが、遠ければ見学するか、できれば実習させてもらうとよいと思います。

〝良い頭〟を作るのは教育の仕事

脳障害児は、脳の障害を医学的に治療することがまず第一です。外科的に脳の悪い部分を切り取るのが良い場合は、そうすることです。ドーマン博士は、そうした方法によって機能が回復したケースを報告しています。

前述した通り脳は一四〇億個もの神経細胞でできていて、よほど頭を使う人でも数分の一しか使っていないだろうと言われています。悪い部分を切除しても、それをカバーすることができるもののようです。

また、内科的な医療も効果を上げることができます。

今はその方面の薬も発達していて、内服薬により、脳障害が快方に向かっている例が少なくありません。

しかし、そういう医療は、脳の正常でない部分を正常な部分がカバーするのが目的であって、それだけでいわゆる〝良い頭〟の持ち主になれる訳ではありません。〝良い頭〟を作るのは教育の仕事であって、それは〝医療〟を越えた仕事です。

ところが、〝良い頭〟を作ることは、〝頭を使う〟ことが第一で、その〝頭を使う〟最高・最良の方法が『石井・ドーマン方式読み方ゲーム』つまり〝漢字遊び〟です。

これについては、第一章で、愛子ちゃんを通して具体的に紹介した通りです。

すでに新聞にも報道されましたので、ご存知の方も多いと思いますが、競馬のレース中に落馬したまま意識を失っている福永洋一騎手の治療のため、五十五年七月、ドーマン博士が来日されました。多忙なスケジュールの一部をさいて頂き、ドーマン博士と、電話でお話をする機会を得ました。

一時間半にわたって福永騎手を診察した結果、「再起は非常に有望」と明るい声で語っておりました。

福永騎手の一日も早い回復を、心より祈ってやみません。